

Title	企業と危機管理、そして健康危機管理時代へ
Author(s)	更家, 悠介
Citation	目で見えるWHO. 2010, 42, p. 6-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86810
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



企業と危機管理、そして健康危機管理時代へ

サラヤ株式会社 代表取締役社長 更家 悠介

■企業と危機管理

1995年1月の阪神淡路大震災、3月の地下鉄サリン事件で改めて注目を浴びた「危機管理」。それまでは事故や災害によって引き起こされる損失を如何にして最小限に食い止めるかという考え方だったかもしれませんが、21世紀に入ると、企業のコンプライアンスそのものが揺らぎ、その結果もたらされる不祥事が多発するなど、企業を取巻くリスクには、実に様々な要因があることを思い知らされることとなります。※図1（事件、事故年表）

私も経営者として、あらゆるリスクに備えをもつべきであると日頃より考えてます。しかし、リスクというものは残念ながら全てを排除することは不可能であるとも承知しております。一般論にもありますが、リスクマネジメントへの考え方は2通りあり、ひとつはリスクを未然に防ぐ、そしてもうひとつは発生したリスクに対しそれを最小限に留める、という考え方です。

企業におけるリスクの代表的なものには、天災、コンプライアンス（法令違反、不祥事など）、海外グローバル危機などが挙げられますが、現代は、そこに新興感染症のリスクも加わり、企業と危機管理の関係も新たな局面を迎えているといえます。

また、各企業にとっても、影響を受けるリスクは様々にもなります。

当社はメーカーであり、新型インフルエンザ対策で申し上げますと、社会的な供給責任として、先ずは市場の要求する商品を製造し、市場のお客様へお届けすることは最重要課題です。全社員の奮闘により、感染拡大期における供給不足を避ける努力をしました。

こうして、今ではあらゆる事項に対して、国内では、現場が主体的にリスクマネジメント活動を推進するようになり、その対策によって、リスクの軽減や解消が実現されております。

しかし、その他にも企業の抱える新興的なリスクマネジメント事例を挙げますと、やはり海外へ

1990年代以降の事件と危機管理意識の高まり

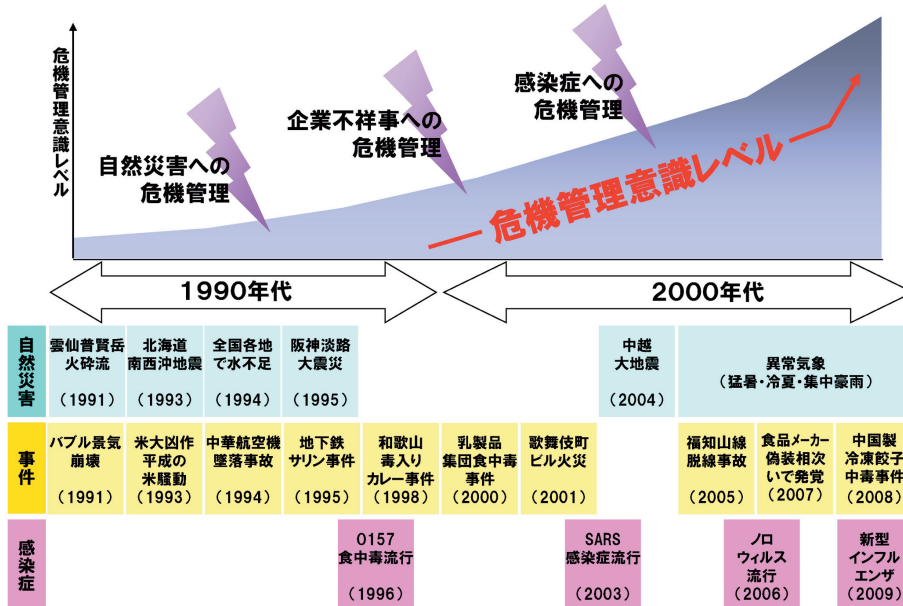


図1

の展開とともに懸念されるグローバル危機となるでしょう。当社も現在、積極的に海外進出を進めており、急成長するアジア市場はもちろん世界に拡大させたいと考えておりますが、その中にもいくつかのリスクは存在します。

経営的な視点で見ますと「為替」などの経営上のリスクも当然ありますが、真っ先に考えるべきは、「社員やその家族の安全」です。世界中で発生する、天災や事故、地域紛争、そしてテロなどが起きると事業どころではなくなります。現に、2001年の米国同時多発テロ以降で考えますと、各企業ともにそういった海外グローバル危機を考えるようになったのも事実でしょう。

こうしたように、企業のリスクマネジメントには様々な要素があります。それと同時に課題もまだまだ山積していることも事実です。まずは、リスクマネジメントに対して、社員の主体的な取り組みをいかにして引き出し、そして伸ばしていくことを経営者としては考えなければなりません。そしてこの取り組みを全社員共通認識の基に、全社を挙げて行うことも重要です。一人ひとりの社員が職場におけるリスク抽出～判定～対策立案～実行までを手掛けるシステム確立も必要不可欠です。不祥事の大小によっては、大企業でさえもあっという間に消滅する時代です。経営トップとしてもリスクに対する感性を研ぎ澄まし、事業活動を継続し、社会的責任を果たしていく意味でも最も重要な課題に立ち向かっていかなければなりません。

■新型インフルエンザ発生と健康危機管理

昨年4月、遂にそのベールを脱いだ新型インフルエンザ。流行拡大のスピードは予想以上に速く、WHO（世界保健機関）はたちまちパンデミック（世界的大流行）を宣言しました。国内においても、政府をはじめ自治体、企業、学校、家庭、個人など、各レベルでの対応が慌しく展開されました。この間、凄まじい量の情報が飛び交い、それに基づく対応は、今もなお変化し続けています。改めて、地球規模で蔓延する感染症の怖さを実感された方も多かったのではないのでしょうか。今後も「集団免疫」を獲得するまでは流行が持続、拡大すると予想され、さらに、第2波の発生も危惧されています。が、

私たち逃げず恐れず、この新しいウイルスと向かい合わなければなりません。

今回の流行では、「ウイルスが低病原性である」「若年層患者の多さ」「重症化リスクの高い患者」などいくつかの特徴がこれまでに明らかになりました。流行が本格化した地域などでは医療機関に多数の患者が訪れ、大変な状況が続きました。残念ではありますが、患者数の分母が増えれば、それに伴い死亡の報告も増加します。ただし、世界的に見ますと日本は「公的医療制度」が確立されており、早期受診が可能であるため、死亡例も少数に食い止められているのも事実です。

そして、何よりも今回の流行では、人々に「手洗い」「うがい」「アルコール消毒」「エチケット」などの予防行動が浸透したこともインフルエンザは然ることながら、その他感染症や食中毒の発生件数の軽減にも寄与したのではないかと考えております。この「予防行動の浸透」は、大変意義深いものであり、「手洗い」や「エチケット」で人の命が守れると言っても過言ではないのかもしれない。

感染症対策は、「健康危機管理」ともいわれ、その言葉が世の中に登場したのは、1998年に発生した「和歌山毒物カレー事件」がきっかけともいわれております。当社は1952年の創業以来、人々の健康を脅かす感染症や食中毒事件（図2 & 写真）と密接に関わってきましたが、そのたびに「手洗い」をはじめとする当たり前の予防行動の大切さを訴え続けてきました。

さて、新型インフルエンザですが、以前の流行時と違い、現代の私たちは文明や医学などを発達させ、多くの情報やツールを手にすることが可能になりました。実際、今回の新型インフルエンザには、「手洗い」「うがい」などの標準的な予防方法や、普段あまり考えることのなかった「咳エチケット」といった“武器”の有効性を改めて知らされました。

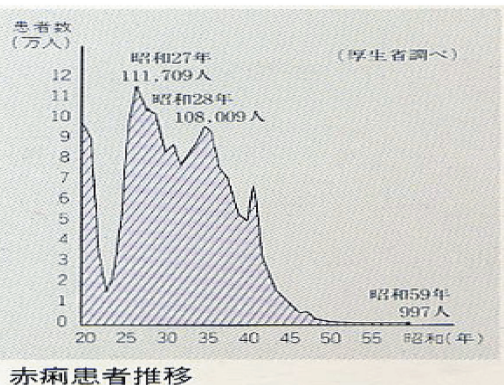
感染症対策で大切なのは、【感染症を正しく知る】、そして【予防行動を始める】という2点ですが、これらは身近にある食中毒や一般的な感冒などの対策としても極めて有効です。

□感染症①

1952年(S27)	集団赤痢(赤痢患者数 戦後ピーク)
1960年代	公害・大気汚染問題(四日市ぜんそく等)
1977年(S52)	和歌山県有田市 集団コレラ
1993年(H5)	院内感染 MRSA問題
1995年(H7)	阪神淡路大震災
1996年(H8)	O-157 大規模集団食中毒
2001年(H13)	米国同時多発テロ 炭そ菌対応
2003年(H15)	SARS 発生
2006年(H18)	ノロウイルス感染症

日本人は、何事にも「清潔さ」を求めます。しかしながら、その「清潔さ」は確かなものでしょうか。人間社会に不可欠な「公衆衛生」の思想を真剣に考え、定着させていくのであれば、「清潔さ」の意識だけではなく、現場における科学的かつ具体的、実践的な「対策」と「モノ」などのツールが欠かせません。おそらく真の感染症対策は、それら予防のためのツールを万人が共通して持ち正しく行うことから始まるでしょう。

□感染症②



感染症新時代といわれる今日、猛威をふるう新型インフルエンザはもちろんですが、今後も次々と私たち人間の世界に登場することが予想される、あらゆる感染症に対し、普遍的な予防対策を一人ひとりが理解し、職場や家庭などで実践することが大切だと考えます。当社もそうした真の感染症対策のために、皆様のお役に立てば幸いです。健康で豊かで、そして安全・安心な社会づくりのために――。

□サラヤは手洗いと口

